

# 岐阜朋同

きじ ひでう ほーく

- 相模御旧跡(箱根・小田原)探訪 1・2
- 「同朋の会」ノスゝメ(岐阜市日置江・願長寺)
- コラム しょうしんげ
- My Book

# 124



笠の平「親鸞聖人御旧跡性信御坊訣別之地」

神奈川县足柄下郡箱根町元宿

神奈川县足柄下郡箱根町元宿

# MyBook

文房具をテーマに、著者の思い出やこだわりや浪漫、長い付き合いの中を感じた様々な事が綴られた随想集。思わず「ああ、あるある。そんなこと。」と、やりと笑つたり、或いは「そうだったのか。」と新たな発見と出会つたりと、「たかが文房具」の事で随分楽しませてもらえた。

それも、ひとえに私が文房具と共に育つてきたからではないかと思う。もしからん勿論、私に限つたことではなく、多くの人が読み書きのできない頃からクレ

ヨンを握り、学校に通うようになつたら、数えきれない程、鉛筆やノートを消費してきたことだろうと思う。社会に出てからも、大なり小なり文房具の恩恵に与り生きているのが私たちである。だから文房具について書かれたものを読めば共感の一つや二つ湧いてくるのは当然の事だろ。

しかし、反面で現代の感覚との齟齬<sup>そご</sup>のようなものを感じた。私個人の感覚かもしれないが、現代の文房具は消耗品の色が強じように思う。著者の語るような一つ一つにエピソードのつまつた文房具は少なくなっているのではないだ

ではないだろうか。または、滅多矢鱈に専門的に特化して、二ツチな需要に応えるが、用途が狭いものもよく見かける。著者の語る文房具たちは、どれもそれなりに汎用性は高いものの、ちょっと不快。といったところに愛嬌のようなものを感じるし、なにより不快から生じる手間の中にこそ、人の心に触れるエピソードが生まれるよう」と思う。

先日、「2020年度・信号機のない横断歩道での歩行者横断時における車の一時停車状況全国調査」(JAF調べ)なるものの結果をあるニュースが伝えていた。県別では長野県が5年連続ダントンの1位に輝いたとのことであった。

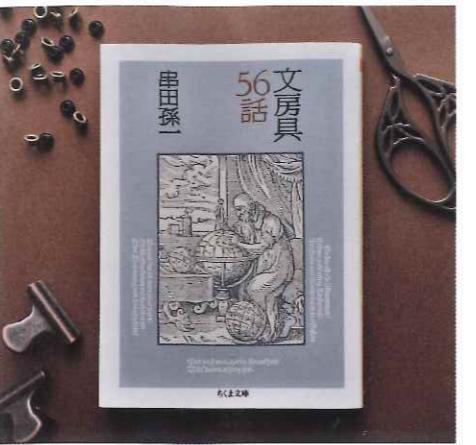
何でもランキンギングを付けて比べるには些か抵抗があるものの全国平均は20%程度なのに、長野県では、72.4%の車が待っている歩行者があれば、横断歩道の前で停車するところ数字には驚きを禁し得ないものがあった。「何故?」といつ疑問が湧きあがってきたのだが、ニュースでは、長野県においては幼少期や小学校・中学校で、「横断歩道を渡るときは手を挙げてドライバーに笑顔で挨拶、また止まって渡してくれたら必ずそのドライバーに頭を下げてお礼を言おう」という指導が子どもたちから提案され、長い間に全県あげて自然と周知徹底されてきたとの分析であった。

そのような習慣が次の世代へ送られていくことを心理学では、「返報性の原理」と言うらしいが、「笑顔でありがとう」の心を相手に伝えたり、逆にお礼を言われたりすることはお互いに気持ちのいいものである。

日常生活の様々な場面でも共通のことであるが、「笑顔でありがとう」の鎖が円やかで心の通った素敵な社会を創造するのではないか。どこの国の選挙で当たり前のように相手を罵り合うことで自分が勝ち上るがうとする人間の醜い相をもう見たくないのは私だけだろうか。

ちなみに、この調査で岐阜県は19.7%、全国26位といふことらしい。

発行・編集：岐阜高山教区出版委員会 真宗大谷派岐阜高山教務所 海老原 章 T500-8054 岐阜市大門町1 TEL.058-266-1378



文房具56話  
田孫一著 ちくま文庫 ¥748

串田孫一著 ちくま文庫 ￥748



先日、「2020年度・信号機のない横断歩道での歩行者横断時における車の一時停車状況全国調査」(JAAH調べ)なるものの結果をあるニュースが伝えていた。県別では長野県が5年連続ダントツの1位に輝いたとのことであった。

編集後記



親鸞聖人の歌碑

60歳を過ぎた親鸞聖人が、住み慣れた常陸の国に妻子を残してまで京都に帰ろうとした理由は、諸説がいくつかあります。聖人の弟子・性信が同行してこの笠の平まで来たところで、聖人は性信を戻す。この時、聖人が詠んだとされる歌が碑となっている。



箱根の御影

箱根権現東福寺から萬福寺を経て、浅草本願寺に貸し出されたまま返却されず、そのまま浅草本願寺所蔵となっている。(右)やむなく、萬福寺には新造されたレプリカが安置された。(左)

## 御旧跡探訪1

になられたのかと考えずにはいられませんでした。別れに際し親鸞聖人が「病む子をばあずけて帰る旅の空心はここに残りこそすれ」と詠まれたとされる歌が石碑に刻まれていました。

「箱根神社」は、古来より「箱根権現」の名で親しまれ、神は仏が衆生利益のために仮に姿を現したものとして信仰されていました。「御伝鈔」によると、親鸞聖人がこの地を訪れた際、夜になつて箱根山中にさしかか

り、たどり着いた人家の戸を叩くと、家人が出てきて「今しがた権現さまから、尊敬すべき客人がこの路を通られるから丁重におもてなしをするようにとの夢告を受けた」と語り、神官たちは親鸞聖人を手厚く迎え、珍味をもつてご馳走を施したと伝えられています。

明治以前は、箱根社中には金剛王院東福寺が置かれ、その住職が箱根権現の別当に就いていました。さらに「親鸞堂」と呼ばました。さもなく、萬福寺には新造されたレプリカが安置された別殿も存在し、親鸞聖人がおもてなしを受けたお礼に贈つ

たといわれる自刻の御真影と、十字名号が安置されました。

しかしながら明治元年の神仏分離政策で金剛王院東福寺は廃寺となり、仏教系の建物はすべて焼き払われ、仏像、財宝の類は打ち壊されました。なかには芦ノ湖に投げ込まれたものもあり、貴重な仏像、法寶物のほとんどが失われたと伝えられています。そのような中、本尊阿彌陀如来および御真影と十字名号は萬福寺に移されました。

親鸞聖人が帰京にあたり、わざわざ険しい道を選んで箱根山を越えられたのは、途中にある箱根神社を訪ねるためであったようです。箱根神社の支配者は、法然上人の門弟であり、親鸞聖人が尊敬していた聖観であるからだと考えられています。また、「御伝鈔」の製作者覺如は、後に本願寺とした大谷廟堂の格を高めるために、青蓮院の有力な一員であつた聖観と親鸞聖人との親しさを強調したく箱根神社訪問をとりあげられたのではないかでしょうか。

## 相模 箱根 小田原

2023年、宗祖親鸞聖人の御誕生八百五十年・立教開宗八百年の時を迎えます。

親鸞聖人は流罪となって越後へ、そして赦免後は関東へ向かい、常陸(茨城県)を中心に念仏の教えを伝えながら20年間、関東に在住しました。

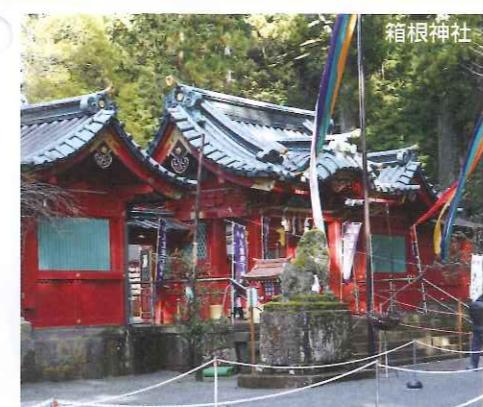
聖人の主著である『教行信証』は、1224年常陸国(稲田の草庵)で著されたとされ、この年を立教開宗の年としています。また聖人は、関東で20年間布教活動をしながらも教団を組織する意志ではなく、門弟たちはそれぞれの地域で門徒集団を形成していました。この時に生まれた門徒集団が、現在の浄土真宗の源流となっています。

聖人は、20年間過ごした関東の地、そして多くの門弟たちと別れ、京都へ戻る決意をします。60歳を過ぎての聖人のこの決意の心底には、いかなるものが流れているかと拝察されます。

今回、聖人と関東の門弟の中の最古参に挙げられる性信が別れたといわれている箱根界隈に、親鸞聖人の足跡を訪ねてみました。

私は、親鸞聖人が箱根神社とどのように関わっていたのか、また笠の平の地はどのような場所か、予備知識がないまま実際にそれぞれの地に出向き、見聞することによって少しばかり箱根の地を知ることが出来ました。

親鸞聖人は、二十年間慣れ親しあり下ると芦ノ湖があり箱根所が続き、七曲りを抜けると、そこから下ると芦ノ湖があり箱根神社があります。



そのころ関東から京都に向かう東海道には、箱根越えて二つの道がありました。一つは箱根山の中腹を右に大回りし、足柄峠を越えていく道で、この道は安全で比較的楽な道であり、もう一つはまづぐ進んで箱根山を登り、箱根峠を越えていく道で、距離は短いがとても険しい道であつたようです。親鸞聖人は急ぐ旅でもなかつたのに、無理をしてまでこの箱根道を行かれたのは何か特別な理由があつたのでしょうか。

笠の平の「笠」というのは経典や仏具を入れて背負う木箱のことです。お弟子を引き連れて京都へ向かう親鸞聖人が、箱根の峠で笠をおろして門弟の性信房を諭し、ご自身の常用の笠と中の聖教を譲り、「関東をまとめると留まるように」と東国教化を託され、お別れされた場所が笠の平であります。実際に訪れてみると、高い木々に囲まれた閑静な地であり、親鸞聖人がどのようなお気持ちで性信房とお別れではないでしょうか。



御伝鈔第四幅 箱根示現

関東から帰洛の途、箱根の峠を越えた親鸞聖人は、箱根権現の夢告を受けた社人から、厚いもてなしを受けられた。



住職は「家庭や学校だけではなく、お寺が地域の中に安心して友達と集まる場所になり、人と人のつながりの大切さ、温もりを肌で感じてもらえるよう努めたいと思います」と語ります。



子ども対象の会としては子ども会「お経をならいましょう」や「子ども報恩講」などがあり、「子どもも御同朋」という心でこれらの会を開いておられるとのことでした。

**ショウシンゴ**

凡聖逆謗齊回入  
如衆水入海一味

凡夫も聖者も、罪を犯したように心を翻せば、様々な川が海に入れば同じ一つの味になるように、みな同じく信心の海に入るのです。

腹いせという言葉がある。怒りや怨みを他方に向けて紛らせ、気を晴らす事を指す言葉だ。腹が立つや、腹わたが煮えくりかえる等、怒りと腹は切つても切れないものなのだろう。幼い頃、飯時に兄弟喧嘩をすると父から「飯が不味くなるから止める。」と叱られた事が思い出される。なので、腹という字に怒りが関係あるのは想像に難くないのだが、よくよく考えると「いせ」とは何か違う事は無かった。

先日、本を読んでいると腹癒せの字に「はらいせ」のルビが振られていたのを見つけた。なるほど、言い得て妙である。怒りで腹が治らぬのを、他方へ向けて癒しているという訳だ。思わず感心した。確かに、自分一人が意に沿わないことに悩まされている時、他の誰かが同じように悩むなら気も晴れるというものだ。

今では「腹いせ」と癒の字を用いないのが一般的であるが、今も腹いせという言葉は多くの人に馴染みがある事だろうと思う。時代とともに風化しない言葉というのは、普遍的であるから残り続ける。大なり小なり、自らの怒りを他者に晴らす浅ましさは誰もが抱えているのではないだろうか。

とはいって、怒りを他者に転嫁したところで本当に気が晴れるのかは甚だ疑問である。勿論、一時は気が紛れる事もあるだろう。しかしながら、殆どの場合、怒りを転嫁したところで問題の本質は変わらない。怒りを抱える人が増えるだけである。怒りが起こる私も、他に怒りを晴らす私も、結局怒りに囚われ救われない身ではないだろうか。そんな、怒りに囚われ、救われ難い我が身が照らされた時、縁とすべき阿弥陀仏の願いの海に出遇えるのではないか。私たちは他人や自分を比べがちである。相手よりも幸か不幸か、意に沿うか沿わぬか。しかし、その海において私たちは、流れ入る路は違えど、誰しもが等しく救われるはずの身でありながら、救われ難い身を生きている事を知らされる。丁度、数多の流れの行き着いた先の海が、均しく潮辛い味のように。



11組  
**願長寺**

「おてらにこやあ」とは、「お寺において」という意味の方言で(岐阜の方には説明不要でしようが...)、「寺子屋」とかけたネーミングです。住職の川並秀樹さんと坊守の仁見さんが中心となり、毎週金曜日の午後3時半から5時までの時間、子どもたちを対象にこの場を開かれています。毎回、小学生から中学生まで10人から20人ほどの参加者があります。

子どもたちは学校が終わると一旦家に帰つてから、お寺にやつて来ます。まず本堂に入つてからご本尊にお参りをし、それぞれに学校の宿題を始めます。宿題は一人でやるとなかなか大変ですが、友達といつしょにやると励



みになり、上の学年の子に教えたもらうこともできます。ここに集う子たちはお寺のご門徒さんばかりではありません。学校の友達を誘つて、その子と一緒に参加したいということで、椅子の裏には「予約席」の張り紙がありました。

「昔はお寺の境内で子どもが遊ぶ風景が当たり前だったけど、最近は少子化で...」という声を時折耳にしますが、今でもお寺が子どもたちの居場所になっている事実があります。



現在の御勸堂は塩害による腐食を防ぐため、コンクリート壁で覆つており開放厳禁となっている。中には須弥壇のみが残っているのだそうだが状況を知る者はいない。

その様子は今にも崩れ落ちそうで、近隣の住宅の敷地に倒れかかる位置にある。改修は不可能と思われ、一刻も早く建て替えが必要を感じる。

御勸堂は、聖人により本願念佛のみ教えが伝えられていた証である。聖人と村人の間の熱意を感じとつていける場所として相続されて欲しいと願う。



真楽寺住職は、聖人は国府津から鎌倉に通うために船を利用していた。漁師との関係が築かれており、このことから関東の真宗寺院は海や河に近い場所に建っていることが多いと話された。当時の仏教では、殺生を生業とする漁師は救われない人々とされていた。もし救われたとしても、その救いには差があった。民衆は仏法を知らずに、ただ仏像を拝んでいたのである。

親鸞聖人が京都へ上られる途中、兼ねてよりこの地に建ててあった御勸堂にて、念佛は皆が平等に救われる他力（仏陀の智慧）を感じとつていける場所として相続されて欲しいと願う。

どんな人でも漏れなく救われていく「分けず、嫌わず、見捨てねんごろに伝えられた。」



手前が御勸堂

勧山信樂院真楽寺は相模湾を望む海辺にてみ教えを伝えている。元は聖徳太子所縁の天台宗の寺院であったが、親鸞聖人のお引止めがあ

り、この時からより建てられていました御勸堂（おすすめどう）にて他力念佛の、み教えを説かれた。布教の地としておよそ7年間滞在されたという伝承が残っている。現在の寺地からは飛び地となっている。

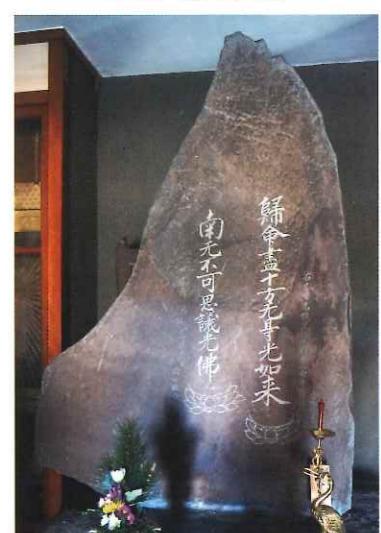
勧化によって真宗寺院となつた。聖人が京都へと上られる際に立ち寄つたのであるが、僧侶や

村の人々からのお引止めがあ

り、この時からより建てられていました御勸堂（おすすめどう）にて他力念佛の、み教えを説かれた。布教の地としておよそ7年間滞在されたという伝承が残っている。現在の寺地からは飛び地となっている。

## 勧山信樂院 真楽寺

### 寺宝 帰命石



元は船の底に入れるバラスト石。浜辺に打ち捨てられていた石が時々震え、音を出すので村人は怖がっていた。親鸞聖人は石を見て天竺のものだと判断し、指

で「帰命尽十方無碍光如來」と「南無不可思議光仏」と書いたところ金色の文字が浮き上がり、石の奇怪はおさまったという伝説がある。



聖人手植えの菩提樹

元の木は火災により焼けてしまったのだが、焼けた株から新芽が出て生きながらえた。現代まで接ぎ木などを経て相続されている。

また土着信仰の跡もあり、菩提樹の周りに石堀七福神が並べら

れている。どれが誰かは判別できぬが意図的に一体欠かしてしまったのだそうだ。これは七福神の一体を菩提樹とし親鸞聖人に見立てているという事である。親鸞聖人がとても慕われていたと感じられた。

どんな人でも漏れなく救われていく「分けず、嫌わず、見捨てねんごろに伝えられた。」